一面
名古屋市立小中特別支援学校事務職員研究大会
二面
グランドデザイン報告・全国大会参加報告

名事研ニュース

平成２５年３月８日発行　第１４５号
発行・名古屋市立小中特別支援学校事務研究協議会
情報部
発行責任者　早川数幸

学校事務のチーム力とは

十八回目の研究大会開催される

平成二十五年一月二十三日に第十八回名古屋市立小中特別支援学校事務職員研究大会が開催されました。「名古屋の学校事務をデザインする-つながり　高めあい　進めよう-」をテーマにして二年目となります。当日は区学校事務研究会の発表に始まり、シンポジウムでは「高めよう！学校事務のチーム力～学校間連携における私の役割～」と題し、学校間連携の理想像について、若い研究部員がその想いを込めて発表しました。平成二十三年度に策定した「名古屋の学校事務のグランドデザイン」（以下「名古屋ＧＤ」）の今年度の年次テーマ「職制と指導体制の組織化」と関わる、充実した内容となりました。他に、名古屋ＧＤについて、今年度名事研組織として取り組んだ内容の状況報告や、八月に開催された全国公立小中学校事務研究大会茨城大会の参加報告と併せてお届けします。

シンポジウム
「高めよう！学校事務のチーム力～学校間連携における私の役割～」

発表者　加藤明美　小笠原雅彦（名事研発表部）
助言者　鈴木博志氏（名古屋市立名城小学校校長）
牧野久美子氏（静岡市学校事務支援室室長）
司　会　田口行博（名事研発表部）

はじめに発表部から「研究部の考える学校間連携の理想像」についての発表がありました。

「学校間連携は学校事務職員が集まっただけのグループではなく、目的を共有し達成するために、それぞれの役割を果たしながら活動をしていく一つのチーム」と考え、安定した学校経営や教育環境の充実を図り、学校事務の質を高める組織としてのチームの役割に着目した発表が行われました。

例えば、チーム内では少経験者が定型業務を行うことでベテランの負担を軽減し、ベテランは判断業務を担うなど互いにサポートし合います。「チーム内のメンバーが自分の立場を自覚し、その役割を果たしていく」ことでチームとしての機能を高め、力を発揮できる学校間連携組織になるという考えを示しました。

また、経験・能力に応じた役割分担を行なう上で、ある程度指示系統のある組織体制が望ましく、拠点校はリーダー、副拠点校は組織のつなぎ役のサブリーダーとし、連携校は連携での成果についてお互いがサポートし合う役割としました。そこに職名と関連付け、拠点校には事務長、副拠点校には主査を置くことを全市で統一すれば、名古屋の学校事務全体のチーム力が高まるとしました。

発表の後半では、職名別の役割について、現在の連携内の基準と研究部が考える役割を考えた上で、具体的な取り組み例として「防災物品一覧の作成」のモデル案を示しました。また、そのような役割を担う上で必要な能力としてコミュニケーション能力などを示し、体系的・組織的な研修が必要であることを提案し、次年度のＧＤ年次テーマ「研修の体系化」へとつながる内容ともなりました。

最後に「学校を取り巻く状況の変化をチャンスと捉え、新たな取り組みにチャレンジし、連携が理想のチームとなるため、一人ひとりが何をすべきか考えましょう」と会場へ投げかけました。

事務職員への期待
鈴木氏の助言

鈴木氏は、①時間の許す限り授業を見ること②渉外の場で活躍すること③学校間連携での役割分担を行う④学校間連携での成果について考えること

以上の四点について助言をされました。

静岡市の実践から
牧野氏の助言

牧野氏は、「つなぐ」をキーワードとした学校事務支援室のこれまでの取り組み、共同実施の組織化は必須であり、そのことで目的意識を共有できたことや、共同実施の利点や目的を共有する重要性について例示しながら説明されました。

参加者とのやりとり
意見・感想を交えて

会場参加者の発表への感想として、若手職員から、連携や職階について発言があり、それを聞いて鈴木氏は、「学校間連携で企画力などを身につけてほしい。そうすれば、自然と事務長・主査の道が開けるのではないか」と発言されました。ベテラン職員からは、学校間連携の問題点や、現状への課題について発言があり、それを受け牧野氏は、「学校間連携そのものが目的ではなく、事務職員として学校経営に参画することが重要である。事務職員の位置づけ等校内の環境づくりも必要となる。財務マネジメントを通して教育活動とどう連動し教員と協働していくか、学校間連携によりノウハウを共有し、子どもたちの学びの環境を平準化してほしい」と話されました。

まとめとして

牧野氏は、「今日の発表の方向性を確実なものとして、研修制度など校長会や教育委員会との連携のもと環境整備をしていくことが必要となると提言されました。

最後に鈴木氏が、「事務の効率化により学校経営への参画を提案されたのはありがたい。教員の指導時間の確保が錦の御旗のように掲げられているが、事務職員が多忙になるのではなく、事務の効率化により生み出した時間の有効活用を考えてほしい。そして学校事務支援センターの方は事務職員がそれぞれの学校で責務を果たせるように、事務職員は学事務支援センターの方を同じ仲間として一緒に活動してほしい」と発言され、大会は終了しました。

あの学校の「ここが知りたい」（守山区研究発表）

守山区は、新設校や新設開設のための母体校に赴任したり、特別支援学校に異動したりした時に困る事がないように、今年度新たに開設された下志段味小学校、平成二十三年度から守山養護学校に設置された産業科の新しい施設等を見学したことについて、二校の見学写真を交えて発表されました。

守山養護学校の報告では、エレベーターの毎月の保守点検の支払事務、階段転落防止の柵など、特別支援学校ならではの施設等が紹介されていきました。産業科の紹介では、生徒が卒業後すぐに就労出来るように、福祉の授業で入浴介助の実習を行うために教室を改装工事した例などが紹介されました。

下志段味小学校の報告では、屋上に太陽光発電パネルが設置されている事、消火器が壁に埋め込まれており教室移動の妨げにならないようになっている事、またバリアフリーになっているので、廊下と下駄箱の境界が分かりにくいのでガムテープで境界線を設けるなど工夫がされている事が紹介されました。

新設校の準備の参考になり、また特別支援学校に勤務した事がない人にとって見聞を広げる事が出来る発表でした。

学校の宝を探そう！（緑区研究発表）

緑区は、事務職員と関わりの深い「備品点検」をテーマとして発表を行いました。まず、事前に区内会員にアンケートをとり、その結果、特に重要と思われる「点検項目」「点検のしかた」「職員との関わり方」の三点を中心に、区内を三つのグループに分け研究を進めました。

点検を行う理由、学校種別による効率的な点検方法の違い、点検の際に備品の有無以外にどのような情報を収集するか、点検を職員に提案する時のポイントについて発表されました。興味深い内容として、経験年数により収集する情報の数に違いが見られたところなどがありました。

また、点検の際、課題となりやすい「不明物品の見つけ方」「処分の方法」については、区内の事例をキャラクターによる対話形式で、大会参加者にも分かりやすく紹介する配慮が見られました。

最後に、研究を通じて備品点検の意義を振り返るという成果を得られたが、実践に至っていないことが課題であり、次年度からは、今年度得た成果を実践に移せられるよう更に研究を進めていきたいとまとめました。

発表を経験して
発表者の感想

◇矢田小学校・加藤明美

大会当日までの研究活動は大変でしたが、研究部員を始め多くの方と試行錯誤、協力しながら当日を迎え、大会終了後はすごく達成感がありました。今回初めて運営側で発表者というかたちで参加することができ、とても貴重な経験となりました。

◇大曽根中学校・小笠原雅彦

今回の発表に、賛成できる点・反対だという点様々な意見を会場でいただきました。反対だという点に関してはみんなで意見を出し合い、どうすれば今よりもより良くできるのか考えていく必要があると思います。また、賛成だからといってそこで考えることをやめるのではなく、より良いものにしていくために考えていきたいと思います。どちらの意見も、名古屋の学校事務を今よりもステキなものにしていきたいという想いがあるから出る意見であり、それは子供たちの笑顔につながることだと信じています。

新しい名古屋の学校事務をみんなの力で～グランドデザインの取り組み～

「名古屋ＧＤ」状況報告

名事研は、平成二十三年度に「学校づくりに積極的に関わり、名古屋の学校事務をより効果のあるものにしていく」ために、「名古屋ＧＤ」を策定し、今年度が二年目となります。「名古屋ＧＤ」は目標に向けた行動に継続性を持たせ、「みんな」で「方向性をあわせる」ための実行策として、年度ごとの「年次テーマ」を設定しています。

平成二十四年度は「職制と指導体制の組織化」のテーマのもと、具体的行動を掲げた行動計画を定め、事業に取り組んできました。

事務局は、「名古屋ＧＤ」を推進していくために、専門部の行動計画について進捗管理を行うとともに、平成二十五年度の行動計画の作成に取り組みました。また、この行動計画についての会員への意見集約結果から、「名古屋ＧＤ」の理念や内容についての浸透が進んでいないことがわかったため、ＰＲリーフレットの作成や行動計画の見直しなどを通して、会員への働きかけを行ないました。

研究部は、今年度の年次テーマに則った研究テーマとして、「職名別の役割と学校間連携の関わり」について研究を進め、学校間連携においての職名別の役割とチームとして仕事をすることの意義・意味を考えました。

研修部は、経験別研修を進めるため、昨年度より行なわれている「ステップアップ研修」の対象を主任相当として開催し、職名に応じた研修を考えました。そのほか、自主研修資料「Ｓｏｌａ」の内容について新規作成や更新を行い、研修機会の充実を図りました。

情報部は、学校事務の平準化として、昨年度作成したソフト「決算書をつくってみよう」の浸透を図るためのＰＲやソフトのバージョンアップを行ないました。また、例年どおりの会員向け資料提供、ホームページの新コンテンツといった取り組みを行い、事務の平準化への一助となるよう活動しました。

世話係会では、「決算書をつくってみよう」の使用状況や決算事務についての調査を行いました。その結果は、情報部によって、「決算書をつくってみよう」のバージョンアップに反映されました。

名事研の組織が一体となり一つの目標に向けて取り組んでいけたことは、一つの成果として報告したいと思います。一方で、事務局や専門部等の各組織が一つのテーマに沿って事業を進める上で、連携のしかたに工夫が必要なことや、部員構成について人数や経験年数といったバランスなどが不十分であることがわかってきました。また、全体で取り組み大きな力を期待しているものの、会員への浸透が不十分であり、大きな成果へつながっていないことも課題です。こうした多くの解決しなければならない課題を整理していくことがあります。

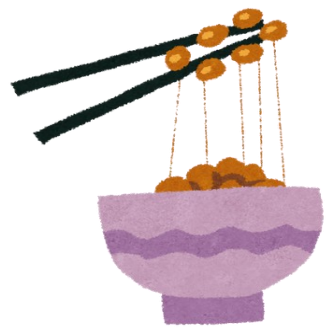
平成二十五年度の年次テーマは「研修の体系化（キャリア形成）」です。今年度の職名別の研究から、その役割を果たす上で必要な能力、そして、そのために必要な研修などについて、会員の皆様と一緒に考えていきたいと思います。

全国の取り組みから

全国公立小中学校事務研究大会 茨城大会レポート

～各地域の実践から見えたもの～

平成二十四年八月二日から二日間、第四十四回全国公立小中学校事務研究大会（茨城大会）がつくば国際会議場で開催され、名事研からも複数参加しています。そこで、会員の皆様へ情報を還元し、今後の研究活動への一助とするために、分科会に参加した方に、分科会の内容や参加した感想などを報告してもらいました。



第一分科会（秋田・岩手・宮城支部）

・分科会ではどんな取り組みの発表がされていましたか？

「学校づくり・人づくり」を共通テーマに、
○秋田支部による研究発表「評価を活かす！！事務職人としての関わり」
○岩手支部による研究発表「これからの学校づくり・人づくりのために」
○宮城支部による研究発表「教育課程の編成・実施をサポートする学校財務の在り方」

・事務研や学校間連携にあたるもので、視点の違う、新しい取り組みはありましたか？

実際に取り組みはまだ行われていませんが、秋田支部から「学校・地域の課題を共有・検討し、取り組みを進めていくための場として、学校間連携（共同実施）が有効ではないか」との発表があり、興味深いと感じました。

・発表の方法で、何か印象に残ったものはありましたか？

分科会後半で行われた「ワールド・カフェ」は、５～６名１テーブルで、少人数での意見交換・自由討議を行う形式です。テーマはテーブルごとに決められ、参加者は様々なテーブルに移動し、その都度テーブルのテーマについて話し合いを行います。より多くの人と話し合うことで新しいアイディアが生まれやすくなるそうです。

第二分科会（岐阜支部）

・分科会ではどんな取り組みの発表がされていましたか？

学校事務の情報共有、処理の統一による効率化や情報発信により教職員の共通理解を深めていくだけでなく「教職員の連携・協働」をもとに、事務職員が中心となって学校全体で学校課題の解決に向き合っていく学校事務の在り方を「岐阜市モデル」とし、その取り組みについて発表が行われました。

・分科会の内容で、名事研に生かせそうなものは？

公費予算の組織的な運用を可能にするために、①学校財務処理運行モデルと財務ソフトの作成、②教職員への統一した提案資料作成、③財務評価と改善を三本柱とし、全教職員の連携・協働に基づく組織的な財務運営の実現を目指して研究に取り組んでいることです。

・特に印象に残っている発表内容は？

主体が事務職員だった「事務部経営案」は自己啓発的な内容になりがちだという反省から、新たにＲ（調査・分析）とＧ（目標）を追加したＲＧ－ＰＤＣＡサイクルを設定し、主体を全教職員とし、協働による学校課題の解決を目指し、「学校事務運営計画」に取り組んでいることです。

第五分科会（茨城支部）

・分科会ではどんな取り組みの発表がされていましたか？

「学校評価から事務部の課題を見つける」「学校評価に取り組んでみる」という事例発表がありました。あまりハードルの高すぎない取り組みで、興味深く発表を聞くことができました。

・分科会の内容で、名事研活動や学校間連携、各自での取り組みなどに具体的に生かせそうな物がありましたか？

「学校評価」に事務職員が直接関わる業務に関する項目を、学校事務職員から提案していくことを、研究会で提案して全校で一斉に取り組めるのではないか、と思いました。

・発表の方法で、印象に残ったものはありましたか？

助言者の筑波大学大学院教授・浜田博文氏が、地元に密着した先生で、以前から研究会活動への関わりを持ってくださり、今回の発表まで長期に渡り見てきてくださった方であり、このような立場の方に顧問などとして関わっていただける研究会はうらやましいな、と感じました。

編集後記

最後までお読み頂き、ありがとうございました。

今回の名事研ニュースは、新たな取り組みとして縦書きの新聞形式のレイアウトに取り組んでみました。

読んで興味深く、皆様の職務への手がかりとなるような紙面を作るため、これからも工夫を加えていきたいと考えております。

今後とも名事研活動にご協力下さい。